わが社のSDGs【29】

廃ガラス 建材へ再生

中村建設

目標：つくる責任 つかう責任

2月末、甲斐市内の工事現場。中村建設（甲斐市）の担当者が舗装作業で、廃ガラスなどをリサイクルした自社製の下地用材を敷いていた。立ち会った施工主は担当者から製品の特徴について説明を受けると「環境に配慮した素材を使っているとPRできる」と語った。

中村建設は2001年に廃ガラスの収集・破砕事業に参入し、建材や舗装材などの新しい材料を開発する取り組みを開始。国連が提唱する持続可能な開発目標（SDGs）のうち、「つくる責任　つかう責任」などに貢献している。中村国男社長は「建材のほとんどが天然の鉱物資源に依存しているため、永久的に使い続けることは困難。代替材料ができれば、資源の枯渇を防ぐことができる」と説明する。

色付き廃瓶ガラスの集積地。細かく砕いてリサイクル製品に活用する＝南アルプス市上今諏訪

自社でガラスの成分を分析するなどして再資源化に向けた研究を進め、これまでにアスファルトに砕いたガラスを混ぜた「キラアスコン」や、埋め砂の代替品として作ったガラスサンドなどを製品化。解体コンクリートと廃ガラスなどを混ぜ合わせた舗装の下地用材「RC－40」なども開発した。いずれの製品もエコマークを取得している。

11年には大手建材メーカーと連携し、光が反射して人や車両を視認しやすい舗装材「キララ透水樹脂モルタル」を開発。20年からは山梨大クリスタル科学研究センターと提携し、有害物質の吸着材や抗菌作用を持つ光触媒などとして再利用できる素材の開発を目指している。中村社長は「建材に限らず、広く社会に役立つ高付加価値の材料を生み出したい」と力を込める。

同社はこのほか、SDGsの「働きがいも経済成長も」などを意識し、働きやすい職場環境づくりに力を入れている。毎年従業員を対象にがん予防の勉強会を開催。会社負担による医療保険加入も進めるなどし、昨年には経済産業省の「健康経営優良法人」に認定された。業界に先駆けて女性技術者の登用にも積極的に取り組んでいる。

中村社長は「次世代が将来にわたって物心ともに豊かに暮らし続けられるよう、企業としてどう貢献できるか常に考え、実践していきたい」と先を見据えている。〈古守彩〉

＝次回は8日に掲載します。

メモ

【所在地】甲斐市万才
【代表者】中村国男
【沿革】1955年、砂利採取業として創業。67年に法人化し、中村建材設立。72年に現在名に商号変更した。廃棄物収集運搬、処分業を加え、2001年にガラス瓶再商品化施設を設置。関連製品の開発、販売を手掛ける。県の「2021年度ワーキングスタイルアワード表彰」受賞。